未完の美学と「日本」性

―― 文化の基層構造と美術展の変質に関する研究

山下 晃平 （無所属）

美術館から野外へという展示環境の拡張に伴い、2000 年以降の日本における新興の大型美術展は、作品展示だけではなく地域文化と密接に関わってきている。一方で美学もまた、諸芸術に対する美的経験から、環境美学や日常美学のように、日常の感性的体験へと議論を拡張している。そこで本稿は、美術展を媒介に、日常美学における日常性と日本の美的属性との交叉について検討する。これまでの日本の美学研究では、茶室や庭園を対象にした美意識や自然観賞が重視されてきたが、本稿では新たに美術展を研究対象として取り上げる。結果として、美術展の変質と日本文化の基層にある終わりなき持続性との連関を捉えることで、未完の美学という日常性の美学における地域的特質を明らかにする。なお本稿では、新興の大型美術展の先駆けにある「三河・佐久島アートプラン 21」（愛知県、2001 年～）に焦点を当てる。

まず本稿では、三河・佐久島アートプラン 21 の活動や訪問者の体験について構造分析を行う。この活動は、三河湾内にある佐久島で地域活性化施策として 2001 年に誕生し、20 年以上持続している。島全体に作品が点在しそれを鑑賞するという点では美術展だが、事務局・アーティスト・島民との協働行為を通して、弘法巡りの祠を修復するなど持続的な営みへと変質している。もはや会期は存在せず、事務局と島民との関係は日常にあり、かつ人が来ては去っていく循環的な構造が生まれている。発表者は、この様態を西洋由来の近代的制度から逸脱した日本における美術展のポストモダン的変容と捉える。

対象の構造分析を踏まえ、本稿では佐久島での主体の美的経験について考察する。日常的体験に関しては、『日常美学』（2007 年）を著したユリコ・サイトウが、対象への美的な判断が人の道徳的価値に結びつくと論じている。対象と主体との関係性については、アーノルド・バーリアントの参与の美学や青田麻未が論じる環境のフレーミング化も参照される。一方で、日本の美的属性に関しては、丸山真男が無窮性や都度立ち現れる「今」を肯定する日本人の規範性を指摘している。あるいは伊藤氏貴は「もののあはれ」の分析を通して「不完全性の表現、その消極性の積極的受容、主客未分」という日本美の内的属性を抽出している。このような主体の感性に対する分析から、対象の構造を読み解く。すなわち佐久島での主体の美的経験には、対象の選択的行為だけではなく、時空間的な循環性や一体性もまた複層的に潜在しており、それが美術展の質的変容をもたらしている。この複層的性質こそが日常美学における「日本」性であり、対象が場に内包された終わりなき営みという未完の美学を捉えることができる。

このように主体の美的経験は、国・地域的な日常的性質との複層性を帯びて立ち現れる。本稿は、ポストコロニアルの時代にあって、美学の普遍性と地域性とを問う理論的考察となる。